

「明けぬれば暮るるものとは知りながら…」は雪の朝の詠か

——『百人一首』道信歌考——

妹 尾 好 信

周知のごとく、定家が『百人一首』に選んだ藤原道信の歌は、

明けぬれば暮るるものとは知りながらなほ恨めしき朝ほらけか
な

の一首である。この歌は道信の家集『道信集』諸本にも見えるが、『後拾遺集』巻十二・恋二に、他の道信歌一首と並んで次のように載っており、定家はこれを典拠にして採録したものと知られる。

をむなのもとよりゆきふり侍けるひかへりてつかはしける

藤原道信

かへるさのみちやはかへるかはらねどとくるにまどふけさのあ

はゆき(六七一)

あけぬればくるるものとはしりながらなほうらめしきあさばら

けかな(六七二)

(『新編国歌大観』第一巻による)

「明けぬれば…」の歌は、『百人一首』に先立って編まれたとされ

る『百人秀歌』はもとより、『定家八代抄』『八代集秀逸』などの秀歌撰にも採られており、定家がこの歌をいかに高く評価していたかが知られる(他に『時代不同歌合』や『後六々撰』などにも載る)。

『後拾遺集』の詞書によると、この歌は、女のところて一夜を過ぎた道信が、雪の降る朝に帰宅してから送った後朝の歌二首のうちの一首ということになる。この歌を「かへるさの…」の歌と連作として読むのは、『百人一首』の古注では「後陽成天皇百人一首抄」(慶長十一年(一六〇六)成立)に、「仍覚(三奈西公條)の説として記されて以来のことであると」と、仍覚(三奈西公條)の説として記されて以来のことであるようだ。以後、現代の注釈書に至るまで、しばしばこの歌を、雪の朝に詠まれた二首連作の後朝の歌と解してきている。たとえば、石田吉貞氏『百人一首評釈』(昭31・有精堂)の「この歌の表面には、雪のことは何も出ていないけれど、夜明けに送り出される時の、寒い白々とした悲しい雪の感覚は、かすかにこの歌のひびきの中にもあって、どこか花やかさの欠けた、もの心細げな歌となっている」とか、島津忠夫氏角川文庫『百人一首』(昭44・角川書店)の「この歌の背後に、前の歌の気分をうつして味わうときは、昨夜のうちとけた二人の仲、今の眼前の一面に薄く降りしいている淡雪の光景が、いっそう、この美しい恋の歌の世界を具象的にするのである」とかいうような鑑賞が行なわれているのである。

ところが、先に置かれた「かへるさの…」の歌には「けさのあはゆき」と雪の朝の情景が詠まれているが、この「明けぬれば…」の歌で

は雪のことに一切触れられていない。賀茂真淵『宇比麻奈備』に、「端詞の雪の意は右の歌にいひて、後に別れし情をいふ」とあるように、詞書にいう雪については先の歌で触れ、後の歌では雪のことはさておいて、しばしの別れもつらい思いを専ら述べたものと解することもできようが、後朝の歌が二首連作されることの珍しさに加えて、片方の歌に当座の重要な景物である雪が全く詠み込まれないことにはやはり異様な感を否めない。

果たして、本当にこの二首は連作の歌なのであろうか。本稿では、この問題について、若干の私見を述べてみたいと思う。

二

『後拾遺集』の二首の歌は、『道信集』諸本にも、順序を逆にして二首連続して載っている。現存する『道信集』の伝本で、その内容が知られるのは七本あるが、次のように二類五系統に分類される。

○第一類本

- (1) 榊原本系統：①榊原本本・②島原図書館松平文庫本
- (2) 桃園文庫本系統：③桃園文庫本・④宮内庁書陵部蔵甲本
- (3) 書陵部丙本系統：⑤宮内庁書陵部蔵丙本

○第二類本

- (4) ⑥杉谷本系統：杉谷寿郎氏蔵本
 - (5) ⑦書陵部乙本系統：宮内庁書陵部蔵乙本
- 系統を同じくする伝本はほぼ同文なので、五系統の各本において、

この歌がどのような形で載っているかを示すと、次のようになる。

①榊原本本(②松平文庫本も同文)

おなし女のもとよりかへりて

あけぬれはかへるものとはしりながら猶うらめしきあさほらけ
かな(三)

女のもとよりゆきのふりける朝にかへりて

かへるさのみちやはかはるかはらねとくるにまとふけさのあ
はゆき(四) (『日本古典文学影印叢刊』9による)

③桃園文庫本(④書陵部蔵甲本も同文)

おなし人のもとにかへりて

あけぬれはくるゝものとはしりながらさもうらめしきあさほら
けかな(三)

をむなのもとより雪のふるをりにかへりて

かへるさのみちやはかはるかはらねとくるにまとふけさのあ
は雪(四) (『書陵部蔵』桃園文庫影印叢書「第十二巻」による)

⑤宮内庁書陵部蔵丙本

○人のもとよりかへりて

明ぬれはくるゝものとはしりながらなをうらめしきあさほらけ
かな(三)

女のもとよりゆきのふるひかへりて

かへるさのみちやはかはるかはらねとくるはまとふけさのあ
は雪(四) (『古典研究会叢書』『私家集』による)

⑥ 杉谷寿郎氏蔵本

おなし人のもとよりかへりて

あけぬれはくるゝ物とはしりながら猶うらめしきあさほらけか
な(三)

雪のふるひ

かへるさのみちやはかはるかはらねととくるにまさる今朝の白
つゆ(四) (『語文』〈日本大学〉第五十四輯による)

⑦ 宮内庁書陵部蔵乙本

おなし人のもとよりかへりて雪のふる日

かへるさのみちやはかはるかはらねととくるにまさる今朝のし
らゆき(三) (『古典研究会叢書』『私家集』による)

このうち、⑦書陵部蔵乙本には「明けぬれば…」の歌が存在しない
が、同類の⑥杉谷寿郎氏蔵本と比較するに、三番歌の詞書の「おな
し人のもとよりかへりて」と「雪のふる日」この間に存在していた「明
けぬれば…」の歌を転写の過程で脱したものと考えられよう(⑦書陵
部蔵乙本は「かへりて」とのところで改行されている)。

したがって、これらいずれの伝本によっても、この二首は、同じ
時に詠まれた連作の歌ではなく、別々に詠まれた独立した歌になっ
ている。相手の女も別人と見るべきであろう。そして、詞書による
と、雪の降る朝に詠まれたのは「かへるさの…」の歌だけであって、
「明けぬれば…」の歌は雪の朝の詠とは書かれていない。すなわち、
雪の朝の詠歌と詞書する歌には「あはゆき」が詠み込まれており、詞

書で雪に触れられていない歌には雪が詠まれていないわけで、「後
拾遺集」に比べて、こちらのほうが自然であるように思える。「後
拾遺集」が、この二首をひとつの詞書のもとに並べて連作として扱
い、ともに同じ雪の朝の詠であるかのように記しているのは、現存
する『道信集』を見る限りにおいては不当であると言わざるを得な
いのである。

三

先に示した通り、「後拾遺集」六七一番歌の詞書は、「道信集」
(特にその第一類本)の同歌の詞書と酷似しているから、この歌につ
いては、「後拾遺集」撰者は「道信集」を典拠として採録したもの
と考えてよさそうに思える。

それでは、「後拾遺集」に採録された道信歌はすべて「道信集」
に拠っていると言えるであろうか。そのことを確かめるために「後
拾遺集」の道信歌のうちここで問題にした二首以外の九首の詞書を、
それぞれ「道信集」の伝えと比較してみる。「後拾遺集」は「新編
国歌大観」第一巻により、「道信集」は「私家集大成」中古Ⅰ「道
信Ⅰ」に翻刻された松平文庫本に拠った。

① 卷一・春上・六九

(かへるかりをよめる)

藤原道信朝臣

ゆきかへるたびにとしふるかりがねはいくそのはるをよそにみ
るらん

『道信集』六七

かへるかり

ゆきかへりたひにとしふるかりかねは　いくそのはるをそら
に見るらむ

②卷八・別・四六五

遠江守為憲まかりくだりけるに、あるところよりあふぎつ
かはしけるによめる　藤原道信朝臣

わかれてのよとせのはるのほるごとにはなのみやこを思ひおこ
せよ

『道信集』五二

ためなりのあそむ、とをたうみになりてくたるに、あふ
きつかはすとて

わかれてのよとせのはるのほることに　はなのみやこをおも
ひをこせよ

③卷八・別・四七〇

ひとのとほきところまかれりけるに　藤原道信朝臣

たれがよもわがよもしらぬよのなかにまつほどいかがあらむと
すらん

『道信集』五三

人の、とをきあ中にくたるに

たれかよもわかよもしらぬよの中に　まつほといかにあらむ
とすらむ

④卷十一・恋一・六四四

をんなのもとにつかはしける　藤原道信朝臣

あふみにかありといふなるみくりくる人くるしめのつくまえの
ぬま

『道信集』一七

人のもとへやる

あふみにかありといふなるみくりくる　ひとくるしめのつく
まひのぬま

⑤卷十二・恋二・六七三

あるひとのもとにとまりてはへりけるにひるはさらにみく
るしとていでざりければよめる　(藤原道信)

ちかのうらになみよせまさる心地してひるまなくともくらしつ
るかな

『道信集』八九

ある人のもとにとまりたれと、ひるはさらにひんあしと
ていて給はねは、おもひわひて

ちかの浦になみかけまさるこ、ちして　ひるまなくともぬる
しそてかな

⑥卷十二・恋二・六七六

題不知　藤原道信朝臣

たまさかにゆきあふさかのせきもりはよをとほさぬぞわびしか
りける

『道信集』一四

小弁かもとおはしたりけるに、又人あるけしきなれば、
かへりて

たまさかにゆきあふさかのせきもりは 夜をとをさぬそわひ
しかりける

⑦卷十三・恋三・七六七

七月七日にをむなのもとにつかはしける 藤原道信朝臣
としのうちにあはぬためしのなをたててわれたなばたにいまる
べきかな

『道信集』二〇

ことしいまたあはぬ女に、七月七日に
としのうちにあはぬためしのなをたて、 わかたなはたにい
まるべきかな

⑧卷十四・恋四・七九八

二月ばかりに人のもとにつかはしける 藤原道信朝臣
つれづれとおもへばながきはるのひにたのむこととはながめを
ぞする

『道信集』三八

三月はかり、ある人に
つれくとおもへばなかきはるの日に たのむこととはなな
めをぞする

⑨卷十六・雑二・九六八

うちよりいばかならずつけむなどちぎりける人のおとも

せでさとにいでにければつかはしける 藤原道信朝臣

あまのはらはるかにわたる月だにもいづるは人にしらせこそす
れ

『道信集』一

ある女に、内よりいばかならずつけよとちまりて侍し
に、しらせていてにければ、またのあしたに

あまのはらはるかにわたる月たにも いづるは人にしらせこ
そすれ

『後拾遺集』が「題不知」で片付けている⑥を除いて、概ね両者の
詞書の内容は一致している。もちろん現存する『道信集』そのもの
ではないが、おそらく道信の没後まもなく編まれたと考えられる、
現存諸本の共通祖本とおぼしき『道信集』によって『後拾遺集』の
道信歌は撰歌されたと考えてよからうと思われるのである。

四

以上のように考えると、『後拾遺集』の詞書「をむなのもとより
ゆきふり侍けるひかへりてつかはしける」は、本来、六七一番歌の
みに掛かると考えるべきであろう。六七二番歌については、もとは
『道信集』にあるごとく別の詞書があったのだが、早い時期に誤脱
が生じて失われてしまったのではないであろうか。たとえば、二首
前の六六九番に、

をむなのもとよりかへりてつかはしける 少将藤原義孝

きみがためをしからざりしいのちさへながくもがなとおもひぬ
るかな (『新編国歌大観』第一巻による)

という、これも『百人一首』に採られて著名な歌が載るが、六七二番歌にもこれと同様の詞書が付されていたのであろうと思う。『後拾遺集』に採られた道信歌の詞書が基本的に『道信集』のそれとは同じ内容である以上、六七二番歌にも同じような詞書があったものが脱落したと想定するのは無理ではなからう。

吉海直人氏は、六七二番歌を『道信集』と比較して、「この歌を同時期の連作として鑑賞しているのは、まさに『後拾遺集』の撰者(藤原通俊)なのである」と言われた(『世界思想ゼミナール』『百人一首の新考察』(平五・世界思想社))が、撰者が意図的に連作として載せたとする、何ゆえこの歌に限って典拠を無視して雪の朝の詠歌と連作として鑑賞したと思ったのか、その理由がわからない。

それよりも、もともと六七二番歌に存在していた詞書が転写の過程で失われたと見るほうが必然性が高いのではなからうか。この部分、次の六七三番歌を含めて道信歌が三首並ぶので、ここには作者名は記されない。短い詞書であれば脱落してしまう可能性は少なくないであろう。あるいは、六七二番歌に本来付いていたはずの詞書は、「ゆきふり侍けるひ」の部分を除いて前の六七一番歌の詞書と酷似していたであろうから、同じ詞書は不要との誤解によるさかしらから、早くに六七二番歌の詞書が故意に削除されたのかも知れない。

『後拾遺集』の成立過程とその諸本発生の事情については、仮名序・目録序・伝本の奥書・『袋草紙』や『八雲御抄』などの記述によって複雑な経路が知られる。それらを踏まえ、さらに諸伝本の和歌の出入りや本文の状況などから、現存諸本は、草稿本系統・家本系統・自筆本系統・流布本系統の四系統に分類されているようである(久保木哲夫氏『日本古典文学大辞典』の「後拾遺和歌集」の項)。そういう中であって、この第六七一・六七二番歌の詞書の状況は現存諸本間に全く異同がないようなので、転写の過程での誤脱ないし削除というのは、あるいは考えにくいのかも知れない。しかしながら、藤本一恵氏によると、「現在、九十余本もあるといわれる諸伝本のうち、草稿本はもろろんのこと、奏覧本や再奏本の原態をそのまま伝えていると確認できる伝本は残念ながら一本も現存しない」(『後拾遺和歌集全釈』上巻(平五・風間書房)「解説」)という本文状況であることを考えると、早い時期に生じた誤脱が、のちのあらゆる伝本に影響を及ぼしたという経緯は想定しうるであろうと思う。もっとも、場合によっては、撰者の通俊自身が、雪の有無に頓着せず、同じ後朝の歌であるから、両歌を一つの詞書のもとに並べてしまった可能性もないわけではなからう。

これまで『道信集』の伝えとの齟齬が指摘されていながら、『後拾遺集』の本文を疑う見解が管見に入らないので、あえて憶測を提出してみた。ご批正を乞う次第である。

——せのお・よしのぶ、広島大学文学部助教——